

● 書評 ●

松岡勲 『父の遺した椅子』

日野 範之

父の戦死八十年の供養として

作者は大阪文学学校の文章講座（日野担当）に二〇二〇年の秋期から出席。が、コロナ禍で順調には出席できず二二年から再開、二カ月に一回の宿題べ切には確実に提出し、その連作が今回、本書に実った。

作者のお父さんは一九四五年一月二二日、中国の武漢の近くで戦死された。本書はその八十年目の命日に供養出版。一章「父の遺した椅子」十篇、二章「友人たちへの追悼文」五篇。全四八ページで読みやすい。

表題となっている「父の遺した椅子」は、印象深い。大工だった父は二度目の応召で、作者の赤ん坊写真しか知らぬまま戦死。父が

遺した椅子は「松の木からできていて、濃い茶色というより黒に近いごつごつとした感触の椅子で、持ち上げるとずっしり重い」。父の存在そのものの椅子が表紙写真である。

母は卒寿祝いの七ヵ月後に逝去。その九回忌に、いところが自分の父から聞いた話として、勲さんの父が二度目の出征の時、見送りにカフェの女の子が来ていて、涙を一杯ためていたそうや、と。「この話を聞いて初めて、父をひとりの人間として感じとることができた」と作者。そのあと父が着物姿で酔っぱらって歩いただろう道を歩くとき、父が歌ったろう歌が浮かんでくる。

「地球の上に朝が来る／

その裏側は夜だろう：

—— 短篇小説の味わいがある文章だ。

\*

もう一つ、靖国神社遺児参拝団についての文章が重い。作者は、靖国遺児参拝についての二つの反応を記す。一九五八年七月に靖国

参拝した作者自身は、

「：僕たちの同じ年頃の男の子たちが、この暑い中で靴を磨いている。そうだ、僕には母もいる。父も見守っていてくれる。もともと強くなり、鍛え、みがき、立派な社会人となり、母を連れて靖国神社を訪ねよう：」

作者は「靴磨き少年を『上から視線』（一種の「選良意識」）で見ている」と。……これと対照的な「国家の嘘を見破った少女」として、作者は次の文章を紹介する。

「：父は召集令状、赤紙一枚によって繰り人形と化され、別れたくもない親、妻子、知人との別離を命ぜられ、且つ犠牲の美名のもとに死をも命ぜられたのだ。私は靖国参拝を喜ばしい事とも、目出たい事とも思わぬ。こうした日を与えられた私を不幸と悲しむ」

作者はこの鋭い視点で書いた人に会いたいと訪ねるが、彼女は二十代後半で亡くなっていた。落胆は大きかった。

\*

高校一年になった時、高校の屋上から茨木市の街並みを眺めて、ふいに「この屋根の下には、生きていると父と同じ歳頃の人たちがいるはず」と思い浮かぶ。息せき切って家に帰ると「お母ちゃん！　うちのお父ちゃん、戦争に行ってるんやから、向こうで人、殺しているはずや」と叫ぶ。裁縫していた母は真っ青になり「うちのお父ちゃんは、虫も殺さんええ人やったから、絶対そんなことあらへん！」と。その言葉に私は返すことができなかつた、と。

戦争加害を考えるきっかけともなった。作者は後年、靖国訴訟に参加してゆく。

戦後八十年の今年、格好の本が出た。

★本書を希望する人は、〒567・0819

茨木市片桐町1の8　松岡勲まで。